

## 【vol.30】楽曲の成り立ちを考えてみる ～その2～

こんにちは、大沼です。

『楽曲の成り立ちを考えてみる～その2～』と言う事で、今回もやっていきましょう。

今回は、ダイアトニックコードの基本的な考え方の解説で終わってしまいましたが、今回こそは、課題曲に入っていきたいと思います。

と、言いつつも、テキストを作ってみたら、イントロの4小節しか進まなかったんですが……。

まあこれも、極力細かく解説している代償だと思ってもう、じっくりとやって行くことにしましょう。

その解説も、最近覚えたばかりの音楽用語のオンパレードで、文章がややこしくなってますし。

何事も最初が肝心ですからね。

さて、前回の内容をざっと確認しておくとして、『let it be』という楽曲は、

- ・key=C である
- ・key=C なので、C メジャースケールがこの曲の基準スケールとなる
- ・主に key=C のダイアトニックコードである、C、Dm、Em、F、G、Am、Bm  $\flat 5$  の7つのコードで構成されている

と、こう言うことでした。

これらを踏まえた上で、早速、実際のコード進行を確認していきましょう。

まずはイントロからです。細かくピアノの音の動きを採ると、もうちょっとコード表記を動かしてもいい気もしますが、理論をわかりやすくするために、シンプルにしたものを見ていきます。

※『Let it be』 0:00～

The image shows a musical score for the beginning of 'Let it be'. It consists of two staves. The top staff is a treble clef with a 4/4 time signature. Above the staff, the chords C, G, Am, F, C, G, F, C are written above measures 1 through 8. The bottom staff is a guitar fretboard with strings labeled T, A, B. Fingerings are indicated by numbers 1-3 on the strings. A dynamic marking 'mf' is present at the start.

譜面の通り、大きくは2拍ごとのコードチェンジです。

見ての通り、Cキーのダイアトニックコードの中から、C、G、Am、Fのコードが使われています。

この曲のことをまったく知らない状態でも、理論がわかっていると、このコード進行を見ただけで曲のkeyが判別できてしまいます。  
(※少なくともこの4小節間の部分は)

なぜなら、この種類のコードの組み合わせが出てくるキーは、Cキーしかないから、ですね。  
(※わかる人にはわかると思いますが、Amキーについてはマイナーキーの解説の時にやります)

ここでもう一度、Cキーのダイアトニックコードを見てみましょう。

- 1、C
- 2、Dm
- 3、Em
- 4、F
- 5、G
- 6、Am
- 7、Bm(  $b5$ )

この中のコードの種類に注目してみると、

メジャー系のコードが、C、F、Gの3つ。(※4和音ならばCM7、FM7、G7)

マイナー系のコードが、Dm、Em、Amの3つ。(※4和音ならばDm7、Em7、Am7)

マイナー  $b5$  のコードが、Bm(  $b5$ )の1つ(※4和音ならばBm7(  $b5$ ))

※Bm  $b5$  もマイナー系のコードですが、とりあえず今は分けて考えておきましょう。

ですね。

その key とスケールに対応したダイアトニックコードというものは、仕組み上必ず、

**メジャー系のコードが3つ、マイナー系のコードが3つ、マイナー♭5のコードが1つ、**

と、このような数に分かれます。

(※通常のチャーチ・モード準拠の曲であれば)

これは基本的な仕組みとして、文字通り『必ず』こうなります。

これをベースに、必要に応じて特殊なコードアレンジをしたりしなかったりするわけですが、それは、最初にこのルールがあつてのものです。

この辺り、重要な事なので、もう少し、詳しく見ていきましょうか。

まず、key が決まって(決めて)、それと同時に、その key に対応したスケールが決まりますね。

例としては、いつも通り、key=C で、対応するスケールは C メジャースケールでいきましょうか。

次に、C メジャースケールの構成音を、トニックである C 音から順番に並べます。

- 1、C
- 2、D
- 3、E
- 4、F
- 5、G
- 6、A
- 7、B

構成音は7音なのでこうですね。

ここから、前回解説した、C メジャースケールのそれぞれの音をルートにして、1音おきに音を重ねてコードを構成すると、

- 1、C        (CM7)
- 2、Dm      (Dm7)
- 3、Em      (Em7)
- 4、F        (FM7)

- 5、G (G7)
- 6、Am (Am7)
- 7、Bm(♭5) (Bm7(♭5))

と、自然とこのようになるわけです。

これはトータル・センターをどの音にして、どのメジャースケールに当てはめてみても、この順番で、このコード群が出来上がります。

試しに他の key でもやってみましょう。

他にもう1つ、とある楽曲があったとして、key=E だとしましょうか。

E キーということは、基準スケールは E メジャースケールですよ。

トニックである E 音から、メジャースケールの全全半全全全半のインターバルで音を並べるとこうなります。

- 1、E
- 2、F♯
- 3、G♯
- 4、A
- 5、B
- 6、C♯
- 7、D♯

要するに、E メジャースケールの構成音は、E、F♯、G♯、A、B、C♯、D♯の7音である、ということですね。※(ギター指板上で確認してみましょう)

で、この構成音をルートに、音を積み重ねて、E キーのダイアトニックコードを構成すると、

- 1、E
- 2、F♯m
- 3、G♯m
- 4、A
- 5、B
- 6、C♯m
- 7、D♯m(♭5)

と、こうなるのです。

こうなるのです、と言われても・・・、と思うかも知れませんが、自然とこうなってしまうのですね。

先にも書きましたが、どの音をトータル・センターにしても、必ずこのダイアニックコードの構成になります。(※メジャーキーの場合)

仕組み的にここまで限定されるのですから、まったく知らない曲でも、ベース音やコードを2つ3つ聴き取れば、かなりの確率で、その曲の key がわかります。

このような音楽の構造があるので、let it be という曲自体を知らなくても、耳コピーと音楽理論の複合技で、キー判別から曲全体のコピー、把握へと繋がるのです。

とまあ、この一曲だけを見ても、まだあまり実感が湧かないかもしれませんが、今後も引き続き、色々な楽曲で理論の使い方やコード分析の内容はやっていきますので。

というか、まだ let it be も全部終わっていないですしね。

では、短いですが、今回は以上になります。

今回学んだ事としては、

**『key と、その key の基準スケールからのダイアトニックコードの導き方』**

ですね。

まだまだ知識の扱いに慣れないかもしれませんが、こう言った事をずっと考えて音楽をやっていると、キーを確認しただけで、パッと7つのダイアトニックコードが頭に浮かぶようになっていきます。

初期段階では、コピーや作曲をしていてキーを決めたら(分かったら)、ノートなどに書き出して、パッと見れるようにまとめておくといいですね。

今回例に挙げた、C と E 以外のキーでも、

同じ様にダイアトニックコードを割り出してみましよう。

ではまた次回。

ありがとうございました。

大沼